MSUB 留学報告

文学部英語英米文学科　**4** 年　平尾大地

１．初めての海外、初めての留学

どれだけ人から留学体験を聞いたり海外に旅行した話を聞いても自分自身で海外を体験するという夢が叶い、いろんな想像をしながら **9** か月のアメリカでの大学生活に挑んだ。想像とは大きく違うこともあり、言語の壁に悩まされることもあったが、先生や友達やホストファミリーの助けもあり何とか乗り越えることができた。普段通りのことも日本にいるときとは違って見え、すべての出来事が新鮮であった。

２．ホストファミリー

最初の三週間は **English as a Second Language Program** で生活に必要な英語力をモンタナ州、特にビリングスの町を通して学んだ。そこで私のホストファミリーだったのがマロニー一家。子供も **3** 人いて元気な家族であった。この三週間だけではなく大学生活中も長期休暇はお泊り、週末には教会に行くなど本当の息子のように接してくれた。キリスト教徒ではないが、宗教を通して人々がどのような生き方をするかを教えてくれた。ことあるごとに神にお祈りするのは全く慣れてはいなかったが、祈りの力を垣間見る出来事があった。あるアスレチック場でカメラを紛失し数週間が経っていたが未だ見つからず、半ばあきらめていた。それを聞いたマロニー家は私のためにお祈りをしてくれたのだ。その翌日にカメラは無傷のまま返ってきた。それから前よりは聖書に目を通すようになった。

３．大学生活

学業については忙しい日々であった。予習をして授業に出て復習をすることで一杯であり、前期は割と負担の少なそうな授業を選び大学生活に慣れ友達を増やすことに専念した。後期は少しレベルの高い授業に挑戦した。一緒に勉強できる友達がいたのは幸運で、エッセイと発表が求められていたが何とか乗り越えることができたときはとても達成感があった。アメリカの大学生は毎日ずっと勉強しているわけではなく、金曜日の夜には実家に帰るか友達の家でパーティーをす

るのが一般的のようだった。私もあやかって毎週金曜日は友達の家にあつまり一緒にご飯を食べた後夜遅くまで話し合ったり映画を見たりキャンプファイヤーなどのアクティビティーをした。彼らにとっては気持ちの休まる金曜日であっただろうが、私にとっては即興で英語を話すいい練習であった。
前期にはバレー大会がありチームを組んで出場した。日本の場合は一つの競技を長く続けるが、アメリカではシーズンによってプレーするスポーツが変わるのが特徴的であった。そのためかどれかが特に上手というより何でもできるといった印象を持った。スポーツで奨学金を受け来ている学生もおり、勉強だけではなくて運動との両立を大学は重視していた。

４．旅行

3 月上旬に **5** 泊 **6** 日でバンクーバー、ビクトリア、シアトルへ旅行した。ビリングスが山の町ならばバンクーバーは海の町。久しぶりのお寿司を食べたり水族館に行ったりした。**3** つの街で観光を楽しんだが、せっかく英語を勉強や文化交流をしに来たのに日本人だけで集まっている語学留学生が沢山見かけた。バンクーバーやビクトリアやシアトルは観光には向いているが勉強するならビリングスの大学はいい環境だと改めて感じた。

５．国際交流

政治的な問題もあり、韓国や中国との学生とうまくやっていけるのだろうかと最初は不安であった。特に中国からの留学生はサウジアラビアからの留学生と同じぐらい多く、韓国から留学生も少なくはなかった。しかし実際は何の心配もなかった。**International Graduation Ceremony** に参加したときに留学生の面倒を見る担当者が言っていた言葉が的を射ていた。**People are people.** 人は人！政治的に仲が悪い国だってあるけども、私たちが今ここで友達なのは変わらない。この人と人との交流が世界をよくしていくのよ。とても素晴らしいスピーチだった。人種や話す言葉を超えて、たった英語という共通語と人を思う気持ちさえあればこんなにも分かり合えるのだと体験できた。

６．さいごに

この **9** か月は絶対に忘れることのない思い出になった。英語や経験だけではなく国籍も話す言葉も価値観も全く違う友達と出会えたことはなによりも宝だと思う。**20** 年間以上日本

で暮らしきたが一度日本から離れてみることで、日本のいいところにも改めて気づかされた。（ご飯がうまい）。帰国したから終わりではなく、自分の体験したことを他の人と共有して、逆にほかに留学経験がある人から話を聞くことで次につなげていきます。支援してくださった方々、本当にありがとうございました。